論　説

国際公共性と国際公共性諸学説（上）
――国際金融システムの規範的方法の検討(2)――

紀　国　正　典

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　国際公共性と国民公共性（以上本号）
Ⅲ　国際公共性諸学説の検討
(1)　国際政治・経済学分野（以上次号）
(2)　国際法分野
(3)　その他分野
Ⅳ　おわりに（以上次々号）

Ⅰ　はじめに

われわれは金融の公共性を探求するために，公共性諸学説の学際的な検討をすすめてきた[1)]。

その成果にもとづけば，公共性とは，第1に，人間のなんらかの共同的諸行為や諸関係を表現するものであり，第2に，それは共同利用（public use），共同利益（public interest），共同制御（public control）という三つの行為側面に分解して把握することができ，第3に，それらは相互に連関しているとしても異なった次元に属する行為様式であるので，そのそれぞれにおいて質的程度や水準はさまざまに異なっており，しかも第4に，独自的にあるいは相互に連関しながらそれらの質的程度や水準は変動するものであるので，それらの行為側面は動態的につまり行為動態として理解されなければならないものであった。たとえば共同利用性が発展したとしても，それが共同利益性を創出できない場

合（例えば集合利益が特権的・階級的階層によって収奪・私物化され続ける場合など）には，荒廃・衰退することもあるが，その原因が有効な共同制御性を創造できなかったためである場合などである。公共性としての発展度はこの三つの行為側面から総合的・動態的に評価されなければならないのである。

このように公共性を共同利用性，共同利益性，共同制御性という三つの行為側面で構成された行為動態として把握し，その運動法則を理論的・歴史的・現実的に明らかにする研究方法論を，われわれは「公共性三元論」と呼ぶことにする。

ところで，そこでの検討では公共性は公共性一般として扱われてきたので，国民公共性と国際公共性はことさら区別されてこなかった。しかも，そこで取り挙げられた諸学説の多くが国民公共性を前提としたものであった。その多くは国民公共性の視点から公共性の考察を行っていた。つまり，そこでは市民・住民は国民として共同の政治・社会・生活の一つの単位のなかに統合されていたのである。

しかし，公共性は，本来的に，国民公共性だけでなく国際公共性もふくむ広い概念である。しかも国民公共性と国際公共性は区別して論じられるべき性格のものであり，国際公共性については特別の考察が必要である。

もちろん，これまで検討した諸学説が取り上げた公共性対象物のなかには，国民公共性の対象物だけでなくその本来の性質から国際公共性の対象物であるものも含まれていた。しかしそこにおいても国際公共性は公共性一般のなかで検討されており，国際公共性の特質について独自に考察されてはいなかった。

したがって，国際公共性について特別に考察する必要性や課題が存在するし，またその意義にも大きいものがある。しかも，われわれが求めようとするのが，国際金融システムの規範的方法論としての金融の国際公共性である。国際公共性についての研究成果は金融の公共性について重要な指針を与えてくれるはずである。

以下，第Ⅱ章で，公共性三元論を国際公共性について理論的に応用・発展させ，第Ⅲ章で，国際公共性に関する諸学説を学際的に検討し，それらの諸成果を継承し，国際公共性の概念をより豊かなものにするつもりである。

Ⅱ　国際公共性と国民公共性

公共性をその公共性対象物に関係する地域的範囲，あるいは関係する行為範囲といってよいもので区分すれば，人間は自覚的であれ無自覚的であれ，あるいは認知していようといよまいと，さらに意思の交流があろうとなかろうと網の目のような無数の共同的諸関係で結ばれているので，それに対応して多数の公共性あるいは公共的諸関係を区分することができる。公共性を地域的に小さな範囲から大きなものまで区分すれば，住居・家具や家計を共同で利用する家庭公共性，道路や公園などを共同利用する社会資本的公共性，市町村から府県レベルさらにアメリカのようなより分権性の高まった州レベルに至る地域的公共性，そして市民・住民が国民国家としての一つの範囲で共同の政治・社会・生活の一つの単位のなかに統合された国民公共性というように区分できる。

国民公共性（national public）とは，国民共同利用性（national public use），国民共同利益性（national public interest），国民共同制御性（national public control）という三つの行為側面で構成されている。国民公共性は，近代国民国家の生成，確立，発展とともに，さまざまに変動しながらも，歴史的にみてみれば，組織的・形式的にいろんな実績や存在様式を示して，最も確固としたものとして発展・変動してきた公共物といえる。

「国際」あるいは「国際的」という用語は，国境をこえた場合の諸関係を表現する概念である。だから2国間や多数国間にわたってかかわる諸関係を示すことになる。したがって国際公共性とは，公共性対象物の関係する範囲，あるいは公共性のかかわる行為範囲が国境をこえて拡大した場合の共同的諸関係である。

公共性とは，われわれの研究成果からすると，共同利用，共同利益，共同制御という三つの行為側面で構成された行為動態である。そうだとすれば国際公共性（international public）とは，国際共同利用，国際共同利益，国際共同制御という三つの行為側面によって構成された行為動態ということになる。

共同利用の範囲が国境をこえて広がった場合の利用諸関係が国際共同利用性

(international public use) である。共同利用によって生じる集合利益が国境をこえた範囲に平等に還元されるのが国際共同利益性 (international public interest) である。さらに，国民国家の協同作業かあるいは国境をこえて権限を行使できる組織や機関を創設することによって，共同利用性が共同利益性を持続的に創出できるようにコントロールするのが国際共同制御性 (international public control) である[2)]。

国際公共性についても，公共性対象物の関係する地域的範囲あるいは公共性のかかわる行為範囲の広がりによって，その国際公共性の具体的諸関係を区分することができる。2国間レベルにおける国際公共性から，多数国間レベル，ブロック国家間レベル，さらにすべての地球市民・住民をふくめたグローバル・レベルの地球公共性 (global public) などの存在を指摘できる。公共性対象物の関係する地域的範囲あるいは公共性の行為範囲が広がれば広がるほど，公共性対象物の地域的・地理的範囲からみた国際公共財としての性格は高まる。例えば，この視点から評価した地球大気の国際公共財的性格はたいへん高度である。

国際公共性は当然に国民公共性をふくむ概念である。なぜなら，国際公共性が成立するためには，国境をこえること，つまり国民公共性の単位や枠組みをこえることが必要であり，国際公共性は国民国家が国境をこえた共同利用的諸関係や共同利益的諸関係，共同制御的諸関係を創造・構築して，初めて発展していくのである。したがって国際公共性が地域的・地理的に発展していくことは，そのなかにより多くの国民公共性を包み込むことになる。国民公共性の発展度や質的程度，様式，内容，規模はそれぞれの国の歴史や国民的・民族的特性を反映して多様であるので，国際公共性が地域的・地理的に発展すればするほど，国際公共性は多様な国民公共性によって構成された複合体としての複雑な性格を強める。

他方で，国際公共性は国民公共性を否定した概念である。なぜなら，国民公共性が国際公共性として発展していくためには，国民公共性が発展的に解消されるか一元化・標準化・統合化されることが必要だからである。国境をこえた共同利用的諸関係や共同利益的諸関係，共同制御的諸関係の発展・構築は，国

民公共性そのものの変革・変容を求めるのである。

したがって国際公共性と国民公共性は対立・矛盾する関係にある。国際公共性と国民公共性との対立・矛盾は，国民国家の生成発展と国際的諸関係の高度化とともに人類社会が長く直面してきた課題であり，今後もそういうものとしてあり続けることが予想される。これは，国際金融の世界では「国際均衡と国内均衡の矛盾」として，現代に至るまで人類社会を長く悩ませてきた問題であり，今後もそうであって，国境をこえた金融のグローバル化が進めば進むほど対立・矛盾が激しくなり，その調整に多大な費用がかかるのである。

このため，国際システムが国家主権によって分断された多様で強固な国民システムの複合的構成体である場合には，これによって国際公共性の発展は妨げられたり，制約を受けたりする。多様で強固な国民公共性が存在することによって，国際公共性の発展が非常に部分的な領域や分野にとどまることもある。国際的諸関係の高度化とともに国際公共性が発展していくが，複雑に変動する矛盾・対立・支配・協調・調整関係をもちつつ，国際公共性と国民公共性が並存する場合が多い。近代社会の現実がその複雑な様相を映し出している。国民公共性が国際的な完全統合によって消滅し，国際公共性が一元的に確立されることも想定できる。国民公共性が否定され国際公共性に統合される程度が強ければ強いほど，国際統合度からみた国際公共財としての性格は高くなる。

さらに忘れてはならないのは，国際公共性のそれぞれの行為側面から評価しても，そのそれぞれの国際的統合度が異なることである。

また公共性対象物の違いによっても，国際公共性の統合度は異なる。例えば，前述した大気の国際共同利用的性格は地域的・地理的範囲からもまた統合度からみてもたいへん高度であるが，国際共同制御的性格についても統合度が高いとは限らないのである[3]。

以上のように，「国際的地域範囲からみた国際公共性」と「国際的統合度からみた国際公共性」という，二つの角度からみた国際公共性の存在様式と可能性について検討してしてきたが，この二つの角度を合成した視点から分析してみれば，国際公共性の存在様式はきわめて多様で複雑なものとなる[4]。

ただし，以上のいずれの角度からみた国際公共性の性格が高いとしても，そ

のことで国際公共性の行為側面のそれぞれについての質的程度や水準がすべて高いとは限らない。例えば国際共同利用性が上述の角度からみて高度だとしても，それが高度な国際共同利益性を創出できるとは限らないし，それを保障できる国際共同制御性が高度に組織されているともいえないのである。なぜなら，われわれの公共性研究の成果を発展させると，国際共同利用性，国際共同利益性，国際共同制御性という三つの行為側面は，相互に連関しているとしても異なった次元に属する行為様式であるので，そのそれぞれにおいて質的程度や水準はさまざまに異なっており，しかも独自的にあるいは相互に連関しながらそれらの質的程度や水準は変動するものであるので，それらの行為側面は動態的につまり行為動態として理解しなければならないからである。国際公共財としての発展度についてもこの三つの行為側面から総合的・動態的に評価しなければならない。

以上のように，公共性研究で得られたわれわれの理論的方法を発展させれば，国際公共性は，国際共同利用性，国際共同利益性，国際共同制御性という三つの行為側面によって構成された行為動態ということになる。いったいどのような国際公共性が生成・発展し，どのように組織され，どのように機能してきたのか，そしてどのように運動しているのか，このことは非常に興味あるテーマであるが，このこと自体が国際公共性の行為動態研究のより具体的・歴史的・現実的な研究課題である。

これから次章で，国際公共性や国際公共財に関する諸学説を考察して以上のことを検証するとともに，それらの研究諸成果を継承してみることにする。そのことで国際公共性や国際公共財に関する研究をより豊かにでき，金融の国際公共性研究に応用できることを期待するからである。（以下次号）

注）

1）本稿は，拙稿［1995］「国際金融システム――グローバル・2国モデル」，［1996a］「国際金融取引 ―― グローバル・2国モデル」，［1996b］「国際金融構造 ―― グローバル・2国モデル」，［1997］「国際金融システム――多数国モデル」，［1999］「公共

性と公共性諸学説 ── 国際金融システムの規範的方法の検討(1) ── 」の続編である。もっと早く研究を続行するつもりであったが，公的・私的な多忙さにより中断を余儀なくされ，現在に至った。

なお，規定枚数を大幅に超えたので，三分割して発表する次第である。

2）最近では，筆者のいう社会的制御の行為側面をガバナンス（governance）という用語で表現するケースが増えてきたが，ガバナンスとは「統治」とか「管理」という訳語が付けられることが多いことに示されているように，制度化・権威化・法制化された制御行為を表す意味あいが強い。

本稿でいう制御行為にコントロール（control）という表現を与えているのは，制度化・権威化・法制化された制御行為もふくめるが，それにとどまらずそれより柔軟で，市民運動的，創造的な制御行為も包括できるようにするためである。

3）いわゆる温暖化防止の気候変動枠組み条約が，具体性に欠け包括的なものにならざるを得なかったこと，そしてその後もその具体的な目標数値化の決定をめぐって混迷してきたことが，それを示している。

地球環境という国際公共財（グローバル・コモンズ）の利用の制御方法を平易に解説したものに，磯崎博司［1995］『地球環境と国際法』がある。

また，地球環境の国際制御という視点からの研究成果に，太田宏［2001］「地球環境問題：グローバル・ガヴァナンスの概念化」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』，井上定彦［1992］「国際的視野での社会的共通資本の形成：地球環境保全と『地球市民』社会の形成」宇沢弘文・高木郁朗編『市場・公共・人間 ── 社会的共通資本の政治経済学』，高村ゆかり［1993］「『Sustainable Development』と環境の利益」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』がある。

地球環境の公共財としての重要性とその有限性を訴え，警鐘を鳴らしたものに，G.J.Hardin［1972］*Exploring New Ethics for Survival:The Voyage of the Spaceship 'Beagle'*（邦訳：G.J.ハーディン，松井巻之助訳［1991］『地球に生きる倫理：宇宙船ビーグル号からの旅から』），D.H.Meadows［1972］*Limited to Grow*（邦訳：ドネラ H.メドウズ，大来佐武郎監訳［1972］『成長の限界：ローマクラブ人類の危機レポート』），K.E.ボールディング［1978］*Ecodyna-mics: A New Theory of Societal Evolution*（邦訳：ケネス・ボールディング，長尾史朗訳［1980］『地球社会はどこへ行く』），D.H.Meadows,D.L.Meadows & J.Randers［1992］*Beyond the Limits*（邦訳：ローマクラブ報告書，芽陽一訳［1992］『限界を超えて』ダイヤモンド社）などがある。

4）国際システムが多様で流動的な多数の国民国家システムによって構成されていることを理論的・現実的出発点に置いて，その動態的発展のあり様を構想すれば，一方の極には，閉鎖的・対立的に分裂した国民国家システムによって構成された国際システムが考えられ，他方の極には国民国家が解消され一元的に統合された国際システムを想定できる。そして，その両極の遠大な間には，様々な分野で協調・協力

関係や相互依存関係が強まったり，あるときには統合関係にまで進んだり，逆にそれが弱まって対立関係が増大したり，さらに支配・従属関係が強まったり弱まったりするなどの国民国家間の，空間軸からみても時間軸でみても実に多彩な諸関係で構成されたきわめて多様な国際システムが存在することになる。

この動態的多様性は，人類社会の歴史的な発展の様々な現実であるし，科学技術の発展（とりわけ運輸・交通手段や情報通信手段の発展）の産物でもある。

そしてこの動態的多様性は，国際政治・経済や国際法分野における思想や理論的立場および社会運動論的立場にも反映している。

例えば，このことを山内進氏は次のように明解に整理する。長くなるが引用・紹介してみよう。

「英国の著名な国際政治学者，ヘッドリー・ブル教授の代表作『無政府社会　世界政治における秩序の研究』（1977年）によれば，近代的な国際システムの歴史には，有力な三つの伝統的な思考があり，それらは互いに競合しあう関係にあった。その一つは『ホッブズ的もしくは現実主義的伝統』である。それは国際政治を戦争状態と考える。その二は『カント的もしくは普遍主義的伝統』である。これは，国際政治の下で潜在的な『人類共同体』が作用していると考える。第三の伝統は『グロティウス的もしくは国際主義的伝統』である。これは，国際政治を『国際社会』の内部に場をしめるものと考える。

ホッブズ的伝統にあっては，個々の国家は常に敵対的で，その争いは勝つか負けるか，『利益』を独占するか完全に失うかのゼロ・サムゲームである。国家は『道徳や法の真空状態』のなかにあって，自身の利害だけで行動する。その行動の規範はただ一つ『功利』である。

カント的伝統は，これと対極に立つもので，国際政治の本質を地球上のすべての個人を結び付ける超国家的靭帯とみる。ここでは，諸国家相互の関係ではなく，人類という共同体のなかのすべての人々の関係が中心に置かれる。この人類共同体の内部においては，すべての人々の『利益』は同一である。この視点からすると，国際政治はゼロ・サムゲームではなく，互いに協力しあう非ゼロ・サムゲームである。しかし，この共存と協力は国家相互のものではない。国家はむしろ排除される。このコスモポリタニズムは絶対的な普遍的道徳と法を有し，内部的差異を認めない。国家主権の尊重とか国家の相互依存という考えはここでは存在しえないし，またすべきではない。

グロティウスの伝統は，ホッブズ的伝統とカント的伝統の中間に位置する。それは，『国際社会』という観念を基礎におく。国際社会とは，諸国家からなる社会であり，諸国家が共存と協力，相互依存のうちに構成する，基本的には平和的な社会である。国際社会は戦争状態にある社会でも，中央政府を有する社会でもない。それは，個別国家の『功利』を認めるが，また法と道徳に対する敬意を有する。そこで求められる『利益』は，一者の利益でも全体に同一の利益でもない。それは，諸

国家の『共通利益（common interest）』にほかならない。……（中略：紀国）……

しかし，このグロティウス的国家社会観も大きく二つの類型に分けることができる。

一つは，多元主義的な国際社会観（pluralism）である。この類型は，個々の国家の主権性や国際社会の多元性に力点をおくもので，国際社会を相互的利益のための合意と協調の世界としてとらえるものである。これは国際社会を構成する諸国家の独立性をより強調する立場で，国家理性論もしくは現実主義の影響を強く受けている。

いま一つは，連帯主義的な国際社会観（solidarism）である。これはメンバー相互の違いと独立性よりも，むしろその同質性と連帯性を重視し，国際社会の一体性を強調する。……（中略：紀国）……多元主義的な国際社会観はマキアヴェリーホッブズ的国家理性論の立場に，連帯主義的な国際社会観は，カント的コスモポリタニズムの立場により近い。国家の主権性をどう位置づけるのかが，その分かれ目である。」山内進［1993］「グロティウスのアンビバレンス ── 国家主権と人類の共通利益 ── 」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』pp.35～37。

このようにグロティウス的立場を，ホッブズ的立場とカント的立場の間に位置づけるのは当を得ているであろう。しかしそのグロティウス的立場も両極に引きずられて分岐するほど，理論世界も多様化・細分化を深めているのである。

ほぼ同様の視点から，初瀬龍平氏は，国際政治分野について次のように諸理論を分類する。

「四つの視座にもとづいて，次のような国際政治の理論（群）が成立する。

ホッブズ的視座によるものは，勢力均衡論，核抑止（nuclear deterrence）論，パワーポリティックスに関連するパワー論，対外経済政策としての重商主義論，外交政策としてのナショナル・インタレスト論などである。

グロティウス的視座によるものは，統合理論，相互依存論，国際レジーム（international regimes）論など，国際秩序に関連する秩序論である。

マルクス的視座によるものは，帝国主義論，従属論，世界システム論などの理論と，民族解放論，労働運動論など帝国主義反対の抵抗論であるが，すべてのシステム論，抵抗論がマルクス的視座に立っているわけではない。

カント的視座によるのは，文化的民族自決論，エスニシティ論，NGO論などアイデンティティの確立をめざす議論である。」初瀬龍平［1993］『国際政治学：理論の射程』p.4。

初瀬氏の場合，ホッブズ的立場とカント的立場の間に，グロティウス的立場とマルクス的立場を並べているが，それが妥当であろう。しかし，カント的立場については，世界市民運動論的立場からの分類になっており，それでは「世界公民法」を提起したカントの意義がそこなわれるので，これについては山内氏の分類の方が整合的である。

なお，国際政治・経済論や国際関係論の理論史を壮大にまとめあげた労作に，浦野起央［1997］『国際関係理論史』がある。本稿作成において，複雑多岐に分かれた膨大な理論群を眺望するのにたいへんお世話になった。またいわゆる国際政治経済学派（IPE）の諸理論を整理するには，坂井昭夫［1998］『国際政治経済学とは何か』の御教示を受けた。記して感謝する次第である。

［参照文献］

阿部浩己・今井直［1996］『テキストブック国際人権法』日本評論社.

阿部浩己［1998］『人権の国際化：国際人権法の挑戦』現代人文社.

阿部誠司［1983］『国際経済相互依存論 ── 新しい国際経済論の試み ── 』税務経理協会.

秋元英一編［2001］『グローバリゼーションと国民経済の選択』東京大学出版会.

有賀貞・宇野重昭・木戸蓊・山本吉宣・渡辺昭夫編［1989］『講座国際政治① 国際政治の理論』東京大学出版会.

馬場伸也［1987］［『人類益』の追求をめざして ── アムネスティの拷問廃止運動を中心に ── ］武者小路公秀・臼井久和編『転換期世界の理論的枠組みⅡ ── 脱国家的イシューと世界政治 ── 』有信堂高文社.

B.J.Cohen［1982］ "Balance-of-payments financing:evolution of a regime" , S. D. Krasner（eds.)International Reg*imes, A special issue of International Organization,* volume 36, number 2, Spring.

B.J.Cohen［1986］*International Banking and American Foreign Policy.*

B.S.Frey,*International Political Economics*（邦訳：B.S.フライ，長谷川聰哲訳［1996］『国際政治経済学』文眞堂）.

C.F.アルジャー［1987］［グローバルな諸問題と価値 ── 価値明確化におけるグローバルな弁証法 ── ］武者小路公秀・臼井久和編『転換期世界の理論的枠組みⅡ ── 脱国家的イシューと世界政治 ── 』有信堂高文社.

Commission on Global Governance 1995［1995］*Our Global Neighbourhood: The Report of the Commission on Global Governance*（邦訳：グローバル・ガバナンス委員会，京都フォーラム監訳［1995］『地球リーダーシップ ── 新しい世界秩序をめざして：グローバル・ガバナンス委員会報告書』NHK出版）.

C.P.Kindleberger［1986］"International Public Goods without International Government", *The American Economic Review,* March.

C.R.Beitz［1979］*Political Theory and International Relation*（邦訳：C.ベイツ，新藤榮一訳［1989］『国際秩序と正義』岩波書店）.

D.B.ボブロウ［1987］「国際政策科学の展望 ── 『予防の政治学』を求めて ── 」武

者小路公秀・臼井久和編『転換期世界の理論的枠組みⅠ ── 国家間関係と政策決定 ──』有信堂高文社.

D.C.Korten［1990］*Getting to the 21th Century*（邦訳：デビッド・コーテン，渡辺龍也訳［1995］『NGOとボランティアの21世紀』学陽書房）.

D.C.Korten［1995］*When Corporation Rule the World*（邦訳：デビッド・コーテン，西川潤訳［1997］『グローバル経済という怪物：人間不在の世界から市民社会の復権へ』シュピリング・フェアーラーク東京）.

D.H.Meadows［1972］*Limited to Grow*（邦訳：ドネラ H.メドウズ，大来佐武郎監訳［1972］『成長の限界：ローマクラブ人類の危機レポート』ダイヤモンド社）.

D.H.Meadows,D.L.Meadows & J.Randers［1992］*Beyond the Limits*（邦訳：ローマクラブ報告書，芽陽一訳［1992］『限界を超えて』ダイヤモンド社）.

E.B.Haas［1975］"On Systems and International Regimes", *WORLD POLITICS,* volume XXXVII, No.2-January.

E.B.Haas［1980］"Why Collaborate？ Issue-Linkage and International Regimes", *WORLD POLITICS,* volume XXXII, No.3-April.

E.B.Haas［1982］"Word can hurt you; or,who said what to whom about regimes", S.D.Krasner（eds.)International Regimes, *A special issue of International Organization,* volume 36, number 2, Spring.

衛藤瀋吉・渡辺昭夫・公文俊平・平野健一郎［1982］『国際関係論（第二版』東京大学出版会.

E.Luard［1990］*The Globalization of Politics*（邦訳：イヴァン・ルアード，大六野耕作訳［1999］『グローバル・ポリティックス』人間の科学社）.

E.Laszlo［1974］*A Strategy for the Future*（邦訳：アービン・ラズロー，伊藤重行訳［1980］『地球社会への目標：世界秩序へのシステム・アプローチ』産業能率大学出版部）.

E.Laszlo［1977］*Goals for Mankind*（邦訳：ラズロー，大来佐武郎監訳［1980］『人類への目標：地球社会への道』ダイヤモンド社）.

古川照美［1991］「国際組織と国際公益」広部和也・田中忠編『山本草一先生還暦記念：国際法と国内法 ── 国際公益の展開 ──』勁草書房.

G.J.Hardin［1972］*Exploring New Ethics for Survival:The Voyage of the Spaceship 'Beagle'*（邦訳：G.J.ハーディン，松井巻之助訳［1991］『地球に生きる倫理：宇宙船ビーグル号からの旅から』佑学社）.

G.Modelski［1987］*Long Cycles in World Politics*（邦訳：浦野起央・信夫隆司［1991］『世界システムの動態：世界政治の長期サイクル』晃洋書房）.

G.J.アイケンベリー［2001］「制度，覇権，グローバル・ガヴァナンス」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.

G.Soros［1998］*The Crisis of Global Capitalism*（邦訳：ジョージ・ソロス，

大原進訳［1999］『グローバル資本主義の危機』日本経済新聞社).
羽鳥敬彦編著［1999］『グローバル経済』世界思想社.
初瀬龍平［1993］『国際政治学：理論の射程』同文舘出版.
星野智［1992］『現代国家と世界システム』同文舘出版.
H.M.Scwartz［2000］*States versus Markets:The Emergence of a Clobal Economy*（邦訳：ハーマン・M.シュワルツ，宮川典之・太田正登・浅野義訳［2001］『グローバル・エコノミー —— 形成と発展Ⅰ ——』文眞堂).
平勝廣［2001］『グローバル市場経済化の諸相』ミネルヴァ書房.
広部和也・田中忠編［1991］『山本草一先生還暦記念：国際法と国内法 —— 国際公益の展開 ——』勁草書房.
広瀬和子［1976］「国際社会と法」武者小路公秀・蠟山道雄編『国際学 —— 理論と展望』東京大学出版会.
堀内昭義編［1990］『国際経済環境と経済調整』アジア経済研究所.
星野俊也［2001］「国際機構：ガヴァナンスのエージェント」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.
井堀利宏［1993］「“国際公共財”の明確化と日本の役割」『日本経済研究センター会報』1993.5.1.15.
池上惇［1990］『財政学 —— 現代財政システムの総合的解明』岩波書店.
池上惇［1991］『経済学 —— 理論・歴史・政策 ——』青木書店.
池上惇［1994］『経済学への招待 —— 現代経済のしくみと日本経済』有斐閣.
池上惇［1996］『現代経済学と公共政策』青木書店.
池上惇［1996］『マルチメディア社会の政治と経済』ナカニシヤ出版.
池田文雄［1968］「宇宙天体条約の基本構造」国際法学会『国際法外交雑誌』第67巻，第1号.
今井賢一［1992］『資本主義のシステム間競争』筑摩書房.
石原孝一・松本博一［1990］『グローバリズムの国際政治経済学』文眞堂.
I.Wallerstein［1984］*The Politics of the World-economy:The States, the Movements,and the Civilization*（邦訳：イマニュエル・ウオーラーステイン，田中治男・伊豫谷登士翁・内藤俊雄訳［1991］『世界経済の政治学』同文舘出版).
井上定彦［1992］「国際的視野での社会的共通資本の形成：地球環境保全と『地球市民』社会の形成」宇沢弘文・高木郁朗編『市場・公共・人間 —— 社会的共通資本の政治経済学』第一書林.
石黒馨［1998］『国際政治経済の理論：覇権協調論の構想』勁草書房.
石黒一憲［1991］『ボーダレス社会への法的警鐘』中央経済社.
石黒一憲［2000］『グローバル経済と法』信山社出版.
稲原泰平［1995］『宇宙開発の国際法構造』信山社.
猪口孝［1989］「国際政治主体論」有賀貞・宇野重昭・木戸蓊・山本吉宣・渡辺昭夫

編『講座国際政治①国際政治の理論』東京大学出版会.
磯崎博司［1995］『地球環境と国際法』実教出版.
岩本武和・奥和義・小倉浩・金早雪・星野郁［2001］『グローバル・エコノミー』有斐閣.
J.Donnely［1986］"International Human Rights:A Regime Analysis" *International Organization,* Vol.40 No.3.
J.Donnely［1991］*International Human Rights:Dilemmas in World Politics.*
J.Frankel［1973］*International Politics:Conflict and Harmony*（邦訳：ジョゼフ・フランケル，国際関係論研究会訳［1975］『国際政治論 ── 抗争と協調 ──』有信堂高文社）.
J.Galtung［1969］"Violence, Peace,, and Peace Research" *Journal of Peace Research,*Vol.6 No.3（邦訳：J.ガルトウング，高柳先男・他訳［1990］『構造的暴力と平和』所収，中央大学出版部）.
J.Galtung［1969］"A Structual Theory of Imperialism" *Journal of Peace Research,*Vol.8 No.2（邦訳：J.ガルトウング，高柳先男・他訳［1990］『構造的暴力と平和』所収，中央大学出版部）.
J.Galtung［1984］*There are Alternatives: Four Roads to Peace and Security*（邦訳：J.ガルトウング，高柳先男・他訳［1989］『平和への新思考』勁草書房）.
J.Mander,E.Goldsmith(ed.)［1996］*The Case against the Global Economy: and for a Turn Toward the Local*（邦訳：ジュリー・マンダ，エドワード・ゴールドスミス，小南祐一郎，塚本しづ香訳［2000］『グローバル経済が世界を破壊する』朝日新聞社）.
J.N.ロズナウ［1987］「アクター，レベル，およびシステムの多元性について ── 『経験主義的多元主義のアプローチ』対『大理論的アプローチ』── 」武者小路公秀・臼井久和編『転換期世界の理論的枠組みⅠ ── 国家間関係と政策決定 ── 』有信堂高文社.
J.N.Rosenau［1990］*Turbulence in World Politics: A Theory of Change and Continuity.*
J.N.Rosenau & E.Czempiel (eds.)［1992］*Governance without Goverment: Order and Change in World Politics.*
J.N.Rosenau［1994］*The United Nations in a Turbulent World*（邦訳：ジェームズ，N.ロズナウ，功刀達朗訳［1995］『激動の世界と国連／湾岸戦争の教訓（国連地球社会の選択Ⅰ）』PHP 研究所）.
J.Tinbergen［1972］*Optimum Social Welfare and Productivity*（邦訳：J.ティンバーゲン，加藤寛・古田精治訳［1976］『最適体制の経済学』東洋経済新報社）.
J.Tinbergen ［1976］*Reshaping the International Order*（邦訳：J.ティンバーゲン，芽陽一・大西昭訳［1977］『国際秩序の再構成』ダイヤモンド社）.

J.Tinbergen and D.Fischer［1987］*Warfare and Welfare*（邦訳：ティンバーゲン，フイッシャー，服部彰訳［1994］『国際平和の経済学』同文舘出版）.

J.W.Botkin［1979］*No Limiteds to Learning: Bridging the Human*（邦訳：J.ボトキン，大来佐武郎訳［1980］『限界なき学習』ダイヤモンド社）.

鴨武彦・伊藤元重・石黒一憲編［1997］『国際政治経済システム 1：主権国家を超えて』有斐閣.

鴨武彦・伊藤元重・石黒一憲編［1998］『国際政治経済システム 2：相対化する国境 I 経済活動』有斐閣.

鴨武彦・伊藤元重・石黒一憲編［1997］『国際政治経済システム 3：相対化する国境 II 法・政治・民族』有斐閣.

鴨武彦・伊藤元重・石黒一憲編［1999］『国際政治経済システム 4：新しい世界システム』有斐閣.

鴨武彦・山本吉宣［1979］『相互依存の国際政治学』有信堂高文社.

鴨武彦・山本吉宣［1988］『相互依存の理論と現実』有信堂高文社.

金子勝［1999］『反グローバリズム —— 市場改革の戦略的思考』岩波書店.

カンプベル・スミス，石井健吉訳［1996］『カントの永久平和論 —— 史的解説と本論』近代文藝社.

川田侃［1988］『国際政治経済学をめざして』御茶の水書房.

川崎恭治［1993］「国際社会の共通利益と国家の国際犯罪」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』国際書院.

K.E.ボールディング［1972］*Beyond Economics : Essay on Society, Religion and Ethics*（邦訳：ケネス・ボールディング，公文俊平訳［1978］『経済学を越えて』ダイヤモンド社）.

K.E.ボールディング［1978］*Ecodynamics:A New Theory of Societal Evolution*（邦訳：ケネス・ボールディング，長尾史朗訳［1980］『地球社会はどこへ行く』講談社）.

K.E.ボールディング［1987］［一つの世界と多数の世界］武者小路公秀・臼井久和編『転換期世界の理論的枠組み II —— 脱国家的イシューと世界政治 ——』有信堂高文社.

菊池裕子［1991］「国際公共財の概念」『日本財政学会第48回大会報告要旨』10月.

木村寛［1991］「人権条約の履行確保と国内的救済の原則 —— 外交保護制度とヨーロッパ人権条約との対比を中心に ——」広部和也・田中忠編『山本草一先生還暦記念：国際法と国内法 —— 国際公益の展開 ——』勁草書房.

紀国正典［1988］「国際金融の安全性・健全性と規制・監督システム— C. M. フリーセンの国際比較調査の検討」『高知論叢』第32号.

紀国正典［1990］「銀行ディスクロージャーと金融の国際化」『高知論叢』第35号.

紀国正典［1992］「多国籍銀行の監督に関するバーゼル・コンコルダートの変遷と意

義」『高知論叢』第45号.
紀国正典［1993］「多国籍銀行業の監督についての国際基準ミニマム」『高知論叢』第46号.
紀国正典［1994］「国際金融統計のディスクロージャーと情報インフラストラクチャー」『高知論叢』第48号.
紀国正典［1995］「国際金融システム ── グローバル・2国モデル」高知大学経済学会『高知論叢』第54号.
紀国正典［1996a］「国際金融取引 ── グローバル・2国モデル」高知大学経済学会『高知論叢』第55号.
紀国正典［1996b］「国際金融構造 ── グローバル・2国モデル」高知大学経済学会『高知論叢』第57号.
紀国正典［1997］「国際金融システム ── 多数国モデル」高知大学経済学会『高知論叢』第60号.
紀国正典［1998］「日本版金融ビッグバンと市民生活 ── 金融消費者主権は確立されるのか ──」高知大学経済学会『高知論叢』第63号.
紀国正典［1999］「国際金融システムと金融制御」池上惇・森岡孝二編『日本の経済システム』青木書店.
紀国正典［1999］「公共性と公共性諸学説 ── 国際金融システムの規範的方法の検討（1）──」高知大学経済学会『高知論叢』第65·66合併号.
紀国正典［2001］「金融コングロマリット ── OECDの研究成果の検討 ──」高知大学経済学会『高知論叢』第70号.
小坂弘行［1994］『グローバル・システムのモデル分析』有斐閣.
基礎経済科学研究所［1998］『地球社会の政治経済学』ナカニシヤ出版.
L.Sklair［1990］*Sociology of the Global System*（邦訳：レスリー・スクレアー，野沢慎司訳［1994］『グローバル・システムの社会学』玉川大学出版部）.
古城佳子［2001］「国際経済：経済のグローバル化とガヴァナンスの要請」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.
倉田稔［2000］『グローバル資本主義の物語：その発展と矛盾』日本放送出版協会.
M.Gurtov［1991］*Global Politics in the Human Interest,*（2 edition）（邦訳：菊井禮次訳［1992］『グローバル・ヒューマニズムの政治学：世界秩序転換のアジェンダ』法律文化社.）
最上敏樹［1989］「世界秩序論」有賀貞・宇野重昭・木戸蓊・山本吉宣・渡辺昭夫編『講座国際政治①国際政治の理論』東京大学出版会.
最上敏樹［1996］『国際機構論』東京大学出版会.
毛利良一［2001］『グローバリゼーションとIMF・世界銀行』大月書店.
M.Bertrand［1986］*Rfaire l' ONU！：un programme pour la paix*（邦訳：モーリス・ベルトラン，横田洋三監訳；秋月弘子，黒田順子，滝澤美佐子訳

〔1991〕『国連再生のシナリオ』国際書院.）
M.Bertrand〔1994〕*L'ONU*（邦訳：モーリス・ベルトラン，横田洋三・大久保亜樹訳〔1995〕『国連の可能性と限界』国際書院.）
M.Walzer〔1995〕*Toward A Global Civil Society*（邦訳：マイケル・ウオルツアー，石田・越智・向山・佐々木・高橋訳〔2001〕『グローバルな市民社会に向けて』日本経済評論社）.
武者小路公秀・臼井久和編〔1987〕『転換期世界の理論的枠組みⅠ ── 国家間関係と政策決定 ── 』有信堂高文社.
武者小路公秀・臼井久和編〔1987〕『転換期世界の理論的枠組みⅡ ── 脱国家的イシューと世界政治 ── 』有信堂高文社.
武者小路公秀・蠟山道雄編〔1976〕『国際学 ── 理論と展望』東京大学出版会.
武者小路公秀・蠟山道雄編〔1976〕『国際政治学 ── 多極化世界と日本 ── 』有信堂高文社.
中村恵〔1993〕「宇宙開発と共通利益」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』国際書院.
日本国際政治学会編〔1986〕『世界システム論』日本国際政治学会編『国際政治』第82号.
日本国際政治学会編〔1994〕『システム変動期の国際協調』日本国際政治学会編『国際政治』第106号.
日本比較政治学会編〔2000〕『グローバル化の政治学』早稲田大学出版会.
小田滋〔1972〕『海の資源と国際法Ⅰ』有斐閣.
OECD〔2001〕*The Future of the Global Economy:Toward a Long Boom?*（邦訳：岸本光永・姫野尚子訳〔2001〕『グローバル・エコノミーの未来：ロングブームに向かっているか』中央経済社）.
大畠英樹〔1989〕「現実主義 ── 『モーゲンソーとの対話』を中心に ── 」有賀貞・宇野重昭・木戸蓊・山本吉宣・渡辺昭夫編『講座国際政治①国際政治の理論』東京大学出版会.
奥田宏司〔1988〕『途上国債務危機と IMF・世界銀行』同文舘出版.
奥脇直也〔1991〕「『国際公益』概念の理論的検討 ── 国際交通法の類比の妥当と限界 ── 」広部和也・田中忠編『山本草一先生還暦記念：国際法と国内法 ── 国際公益の展開 ── 』勁草書房.
O.R.Young〔1980〕"International Regimes:Problems of Concept Formation", *WORLD POLITICS,* volume XXXII, No.3- April.
O.R.Young〔1982〕"Regime dynamics:the rise and fall of international regimes", S. D. Krasner（eds.）International Regimes, *A special issue of International Organization,* volume 36, number 2, Spring.
O.R.ヤング〔1987〕〔国際制度 ── そのマクロ行動の決定要因を求めて ── 〕武者

小路公秀・臼井久和編『転換期世界の理論的枠組みⅡ ── 脱国家的イシューと世界政治 ──』有信堂高文社.

O.R.Young［1994］*International Governance.*

O.R.ヤング［2001］「グローバル・ガヴァナンスの理論：レジーム理論的アプローチ」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.

太田宏［2001］「地球環境問題：グローバル・ガヴァナンスの概念化」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.

大谷良雄編著［1993］『共通利益概念と国際法』国際書院.

大谷良雄［1993］「国際社会の共通利益概念について ── 試論」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』国際書院.

P.Dicken［1998］*Global Shift*（邦訳：ピーター・ディッケン，宮町良広監訳［2001］『グローバル・シフト（上）（下）』古今書院）.

P.R.Kregman［1998］*The Accidental Theorist: and Other Dispatches from the Dismal Science*（邦訳：ポール.クルーグマン，三上義一訳［1999］『グローバル経済を動かす愚かな人々』早川書房）.

R. A. Falk, S. S. Kim,S.H.Mendloviz(eds.)，［1981］*Toward a Just World Order.*

R.A.Falk［1995］*On Human Governance:Toward a Order Global Politics,* The World Order Models Project Report of the Global Civilization Institute.

R. ボアイエ，山田鋭夫共同編集［1997］『国際レジームの再編』藤原書店.

R. G. Gilpin［1987］*The Political Economy of International Relations*（邦訳：ロバート・ギルピン，佐藤誠三郎・竹内透監修・大蔵省世界システム研究会訳［1990］『世界システムの政治経済学』東洋経済新報社）.

R.G.Gilpin［2000］*The Challenge of Global Capitalism:The World Economy in the 21st Century*（邦訳：ロバート・ギルピン，古城佳子訳［2001］『グローバル資本主義：危機か繁栄か』東洋経済新報社）.

R.N.Cooper［1968］*The Economic of Interdependence.*

R.N.Cooper［1972］"Economic Interdependence and Foreign Policy in the Seventies", *WORLD POLITICS,* volumeXXIV, No.2-January.

R.N.Rosecrance［1963］*Action and Reaction in World Politics: International Systems Perspective.*

R.O.Keohane and S.Nye［1974］"Transgovernmental Relations and International Organizations",*WORLD POLITICS,* volume XXXVII, No.1-October.

R.O.Keohane and S.Nye［1976］*Power and Interdependence.*

R.O.Keohane［1982］"The demand for international regimes", S.D. Krasner

(eds.) International Regimes, *A special issue of International Organization,* volume 36, number 2, Spring.

R.O.Keohane [1984] *After Hegemony :Cooperation and Discord in the World Political Economy* (邦訳：ロバート・コヘイン，石黒馨・小林誠訳 [1998]『覇権後の国際政治経済学』晃洋書房).

蠟山道雄 [1976]「国際政策学の展望 ── 国際公共財をどうとらえるか ──」武者小路公秀・蠟山道雄編『国際学 ── 理論と展望』東京大学出版会.

坂井昭夫 [1991]『日米経済摩擦と政策協調』有斐閣.

坂井昭夫 [1993]『マクロ政策協調の現段階』京都大学経済研究所，KIER リプリントシリーズ No.369.

坂井昭夫 [1993]『覇権理論とポスト冷戦秩序シナリオをめぐる論壇状況』京都大学経済研究所，KIER，9306.

坂井昭夫 [1995]『ネオ・リアリズム―覇権安定論―国際公共財論―「国際政治経済学」―サーベイの一環として―』京都大学経済研究所，KIER，9502.

坂井昭夫 [1995]「覇権国理論をめぐる論壇状況」『関西大学商学論集』第40巻，第2号.

坂井昭夫 [1995]「ネオ・リアリズムと国際公共財」『関西大学商学論集』第40巻，第4・5号.

坂井昭夫 [1997]『「国際的相互依存論」とは何か? ── 「国際政治経済学」サーベイの一幕 ──』京都大学経済研究所，KIER，9701.

坂井昭夫 [1998]『国際政治経済学とは何か』青木書店.

坂井昭夫 [1999]『国際公共財としての通貨システム』京都大学経済研究所，Discussion Paper No.9804.

坂本義和，大串和雄編 [1991]『地球民主主義の条件：下からの民主化をめざして』同文舘出版.

櫻井公人・小野塚佳光編著 [1998]『グローバル化の政治経済学』晃洋書房.

佐藤哲夫 [1993]「国際社会の共通利益と国際機構：国際共同体の代表機関としての国際連合について」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』国際書院.

佐藤哲夫 [1993]『国際組織の創造的展開』勁草書房.

S.D.Krasner (ed.) [1982] International Regimes, *A special issue of International Organization,* volume36, number2, Spring.

S.D.Krasner [1982] "Regimes and the limits of realism:regimes as autonomous variables" ,S.D.Krasner (ed.)International Regimes, *A special issue of International Organization,* volume 36, number 2, Spring.

S.D.Krasner [1982] "Structural causes and regime consequences:regimes as intervening variables", S.D.Krasner (ed.)International Regimes, *A special issue of International Organization,* volume 36, number 2, Spring.

S.D.Krasner（ed.）［1983］*International Regimes.*

S.D.クラズナー［2001］「グローバリゼーション論批判：主権概念の再検討」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.

関下稔・森岡孝二［1992］『世界秩序とグローバルエコノミー』青木書店.

関下稔・石黒馨・関寛治編［1998］『現代の国際政治経済学：学際知の実験』法律文化社.

S.Haggard & B.A.Simmons［1987］"Theories of International Regimes", *International Organization,* volume 41, number 3.

篠原梓［1993］「国際法定立の新動向と共通利益概念」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』国際書院.

城山英明［2001］「国際行政：グローバル・ガヴァナンスにおける不可欠の要素」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.

総合研究開発機構編［1994］『経済のグローバル化と法』三省堂.

杉原高嶺［1975］「一般利益にもとづく国家の出訴権（一）」国際法学会『国際法外交雑誌』第74巻，第3号.

杉原高嶺［1975］「一般利益にもとづく国家の出訴権（二・完）」国際法学会『国際法外交雑誌』第74巻，第4号.

杉本昭七編著［1993］『現代世界経済の転換と融合』同文舘出版.

S.George［1977］*How the Other Half Dies*（邦訳：スーザン・ジョージ，小南佑一郎・谷口真理子訳［1984］『なぜ世界の半分は飢えるのか』朝日新聞社）.

S.George［1988］*A Fate Worse than Debt*（邦訳：スーザン・ジョージ，向壽一訳［1989］『債務危機の真実 —— なぜ第三世界は貧しいのか ——』朝日新聞社）.

S.George［1992］*The Debt Boomerang: How Third World Harmus us All*（邦訳：スーザン・ジョージ，佐々木健・毛利良一訳［1995］『債務のブーメラン』朝日新聞社）.

S.George & F.Sabelli［1994］*Faith and Credit: The World Bank Secular Empire*（邦訳：スーザン・ジョージ，毛利良一訳［1996］『世界銀行は地球を救えるのか：開発帝国50年の功罪』朝日新聞社）.

S.George［1999］*The Lugano Report: On Preserving Capitalism in the Twenty-First Century*（邦訳：スーザン・ジョージ，毛利良一監訳［2000］『グローバル市場経済生き残り戦略：ルガノ秘密報告』朝日新聞社）.

S.Strange［1982］"Cave! hic dragones:a critique of regime analysis", S. D. Krasner（eds.）International Regimes, *A special issue of International Organization,*volume 36,number 2, Spring.

S.Strange［1994］*States and Markets: An Introduction to International Political Economy,* 2 nd ed.（邦訳：スーザン・ストレンジ，西川潤・佐藤元彦訳［1994］『国際政治経済学入門』東洋経済新報社）.

新開陽一［1992］「新しい世界システムと国際金融」大蔵省財政金融研究所『フィナンシャル・レビュー』December.
田端茂二郎［1950］『世界政府の思想』岩波書店.
高林秀雄，小寺初世子，山手治之，松井芳郎［1990］『国際法Ⅰ』『国際法Ⅱ』東信堂.
高橋一生編［1998］『グローバリゼーションと貧困：第2回 FASID フォーラム報告書』外務省／FASID.
高村ゆかり［1993］「『Sustainable Development』と環境の利益」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』国際書院.
柘山尭司［2001］「国際法の視点：国連総会決議の法秩序形成機能」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.
田口富久治・鈴木一人編著［1997］『グローバリゼーションと国民国家』青木書店.
田中利幸［1991］「国際法益と国内刑事管轄」広部和也・田中忠編『山本草一先生還暦記念：国際法と国内法 ── 国際公益の展開 ── 』勁草書房.
田村正勝・臼井陽一郎［1998］『世界システムの「ゆらぎ」の構造：EU・東アジア・世界経済』早稲田大学出版部.
田中明彦［1989］「世界システム論」有賀貞・宇野重昭・木戸蓊・山本吉宣・渡辺昭夫編『講座国際政治①国際政治の理論』東京大学出版会.
田中明彦［1989］『世界システム』東京大学出版会.
T.Buergenthal［1995］*International Human Rights in a Nutshell*（邦訳：トーマス・バーゲンソル，小寺初世子訳［1999］『国際人権法入門』東信堂）.
The World bank［1995］*Governance and Human Rights ── Rev. and Updated ── .*
富田俊基［1990］「国際システムの構造変化と日本 ── 緊張緩和と相互依存──」大蔵省財政金融研究所『フィナンス』4月号.
富田俊基［1996］『冷戦後の世界経済システム』東洋経済新報社.
鶴田満彦［2000］『グローバル化のなかの現代国家』中央大学出版部.
土山實男［2001］「アナーキー下のグローバル・ガヴァナンス：リアリズムとの共有空間」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.
植木俊哉［1991］「国際組織による国際公益実現の諸形態」広部和也・田中忠編『山本草一先生還暦記念：国際法と国内法 ── 国際公益の展開 ── 』勁草書房.
浦野起央［1997］『国際関係理論史』勁草書房.
臼井久和・内田孟男編［1990］『新国際学・混沌から秩序へⅠ：地球社会の危機と再生』有信堂高文社.
臼井久和・内田孟男編［1991］『新国際学・混沌から秩序へⅡ：多元的共生と国際ネットワーク』有信堂高文社.
渡辺昭夫・土山實男編［2001］『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.
渡辺昭夫・土山實男［2001］「グローバル・ガヴァナンスの射程」渡辺昭夫・土山實

男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.
吉田和夫［1989］「国際公共財試論 —— パックス＝アメリカーナから国際協調時代へ——」大蔵省財政金融研究所『フィナンシャル・レビュー』December.
吉田和夫［1993］『システム摩擦 —— 国境をもつ資本主義』日本評論社.
山影進［1989］「相互依存論 —— パラダイムのなかの理論群 ——」有賀貞・宇野重昭・木戸蓊・山本吉宣・渡辺昭夫編『講座国際政治①国際政治の理論』東京大学出版会.
山本草二［1966］『宇宙通信の国際法 —— 国際企業の法形態として ——』有信堂高文社.
山本草二［1968］「国際共同企業と国内管轄権行使の抑制」国際法学会『国際法外交雑誌』第63巻，第6号.
山本草二［1968］「国際行政法の存立基盤」国際法学会『国際法外交雑誌』第67巻，第5号.
山本草二［1982］『国際法における危険責任主義』東京大学出版会.
山本草二［1983］「国際行政法」雄川一郎・塩野宏・園部逸夫編『現代行政法体系1：現代行政法の課題』有斐閣.
山本草二［1985］『国際法』有斐閣.
山本草二［1987］「南極資源開発の国際組織化とその限界」大沼保昭編『国際法，国際連合と日本：高野雄一先生古希記念論文集』弘文堂.
山内進［1993］「グロティウスのアンビバレンス —— 国家主権と人類の共通利益 ——」大谷良雄編著『共通利益概念と国際法』国際書院.
山本吉宣・薬師寺泰三・山形進編［1984］『国際関係理論の新展開』東京大学出版会.
山本吉宣［1989］『国際的相互依存』東京大学出版会.
山本吉宣［1996］「国際レジーム論 —— 政府なき統治を求めて」国際法学会『国際法外交雑誌』第95巻，第1号.
山本吉宣［2001］「安全保障：グローバル・ガヴァナンスの境界領域」渡辺昭夫・土山實男編『グローバル・ガヴァナンス』東京大学出版会.
横田洋三［2001］『国際機構の法構造』国際書院.
横田喜三郎［1948］『世界国家の問題』国友社.
吉井淳［1991］「技術移転における公益と私益 —— 深海底開発と技術移転，国際公益をめぐる管轄権の構造，国際公益の形成という視点から ——」広部和也・田中忠編『山本草一先生還暦記念：国際法と国内法 —— 国際公益の展開 ——』勁草書房.